



# 眼と眼

Eyes

岡本太郎の版画とグッズ

TARO OKAMOTO, PRINTS & GOODS

かこみのなかにマルを  
ふたつ穿てば顔ができあがる —

岡本太郎はそんなことがらのなんでもなさ、  
おおらかさをとても気にいっていたといいます。

「眼」— そこからいろいろなものを吸収し、また、  
その表情によって外がわへ発信する器官。けれどわたし  
たちはその同じ「眼」が、いっぽうでなにも映さない、からっ  
ぽなものである時のことも経験的に知っています。満たされ、  
充実した眼とはうらはらに、からっぽの眼、黒い穴のように、  
すいこまれてしまうような空虚なものとしての眼。

「からっぽの黒い穴」ときくと、すこしさみしげで、すこ  
しこわい気もしますが、ここにあるユーモラスな空気  
は、どうやらそんな「眼」によってもたらされている  
ようでもあります、たいへんふしきです。

今回、ギャラリー石榴の展示では、岡本太郎  
の「眼」をテーマに、版画10余点と  
1950年代からのグッズおよそ  
30点を紹介します。



石と樹 *Stone and Tree*

Etching

1977

ed.100

35.9×27.5

眼と眼 *Eyes*

Etching

1977

ed.100

35.8×28.7

風神 *God of Wind*

Etching

1977

ed.100

35.7×28.8



犬 *Dog*

lithograph

1976

ed.100

39.0×56.5

子供の時間 *Children Time*

silkscreen

1974

ed.100

48×40

クリマ *Climat*

lithograph

1976

E.A(ed.100)

39.0×48.0



「むすめ」 花器 陶  
大阪万博 扇子（紫） 紙、プラスチック  
「夢の鳥」 ポット 陶  
座ることを拒否する椅子 陶（ミニチュア）  
28.0×28.8×19.0  
21.5×27.4  
39.0×32.0×12.5  
7.3×7.8×7.3

映画「宇宙人東京に現る」より「ハイラ人」 ソフトビニール  
大阪万博 扇子（赤） 紙、プラスチック  
「夢の鳥」 ティーカップ 陶  
近鉄バッファローズ ミニヘルメット プラスチック  
19.0×22.8×6.0  
21.5×27.4  
12.8×6.0×9.2  
7.2×6.4×12.5

Eyes

TARO OKAMOTO, PRINTS & GOODS

忘れようとしているのだ。

下らないことをごちゃごちゃ覚えていると、

いちばん大事なことを

頭に入れるための場所が無くなる。

- 岡本 太郎

ガラス 28×10.5×10.5  
水差し男爵



商品としての岡本太郎、岡本太郎としての商品

岡本太郎は、忘れるこの名人であった。

忘れっぽいどころではない。なにしろ「瞬間、瞬間があるだけ」の人である。あるときのこと、

太郎のところへ60年安保についての取材がやつってきた。

申し入れを受けていたにもかかわらず、当人は開口

一番「君、アンポって何だ」。戸惑ラインタビュア一

の説明を聞き終わるや、急に思い立つて

作品の手直しをしたいという。ひとしきり筆を

ふるつて再びカメラの前に座った太郎は一言、

「君、アンポって何だ」。……「忘れようとしている

のだ。下らないことをごちゃごちゃ覚えていると、

いちばん大事なことを頭に入れるための場所が

無くなる」とはこのときのインタビュアー、

筑紫哲也が伝える太郎の格言である。

なるほど忘却は、記憶のための技である。だが太

郎にとつてはおそらく、忘れること自体が、自己目的化した「大事なこと」でもあつたはずである。

美学、美術史、美術館と、いすれにせよ蓄積と記憶に多くを負っている美術にとって、忘却はいわば敵である。しかし岡本太郎はすぐさま忘れる。彼がファインアートの流れとどうにも折り合いが悪いのは、要するにこの点に関わっているといつてい。その特性を端的に示すのが、彼が無数に生み出したグッズ——コモディティといった方がよりふさわしいと思うが——である。彼自身「瞬間、瞬間」に忘れて新たな活動に手をつけていくと同時に、

そのキャラクターを次から次に消費させてしまふのである。忘ることなくして消費は進まない。忘却をバネに大人数が新しいものに飛びつくときに生まれるうねりがいわゆるブームだが、いつからか太郎が毎度ブームとして断続的にメディアに登場しているのは、彼がよく消費され、よく忘れられている証であるだろう。

よく知られる通り、太郎は自作のほぼすべてを手元に置き、潔癖といえるほどに「作品」の商品化に抗おうとした。しかし一方で、美術家としては他に例を見ないほど高い商品性を誇ったのもまた太郎その人である。マルチプルと称して控えめに市場へ足を踏み入れるアーティストたちを傍目に、彼はほとんど無節操といえるほどにグッズを

生み出し、果ては彼自身すら商品化させてしまつた。

本流の美術からすれば不純か知らないが、そうしてぐるぐるとサイクルを廻し、向こう見ずにイメージを拡散させるところに世紀の忘れん坊たる岡本太郎の真骨頂がある。

そういうえば太郎が学んだマルセル・モースの研究対象

として名高い「ボトラッヂ」は、いつまでも滞留することのない消費サイクルシステムであつた。

明快な輪郭と色彩、そして擬人化といったそもそもキャラクタ化に向いた表現要素

についての分析も結構だが、ひとまずそれは二の次である。商品性を境目にしたアヴァン

ギャルド「で」キッチュな、奇妙なキメラ状態こそが太郎の面白さではあるまい。



「若い夢」 ブロンズ  
22.0×20.0×20.0

君、タローリって誰だ！

さて、その忘却に反して太郎グッズを蓄積したコレクションと、これまた太郎イメージ拡散の一端をなした版画のコレクションがこのほど披露されると、う。ありそな企画でありながら、「岡本太郎」と「コレクション」との巡り合いは、そうしたわけで非常にまれな機会なのである。

成相肇（府中市美術館学芸員）



編集・発行 | ギャラリー石榴 執筆 | 成相 肇（府中市美術館学芸員）

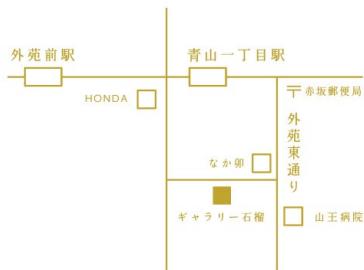
デザイン | 工藤 波夫 協力 | 伊藤 仁一

# 眼と眼 岡本太郎の版画とグッズ

## I. 南青山Room

2011年 6月18日(土) - 26日(日)

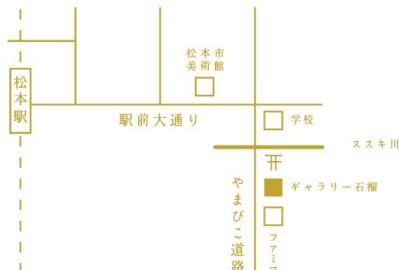
11:00am - 7:00pm



## II. 松本

2011年 7月2日(土) - 10日(日)

10:00am - 6:30pm



107-0062

東京都港区南青山 1-11-39

1139 南青山2F

Tel・Fax : 03 3468 9690

aoyama@g-sekiryu.com

東京メトロ銀座線か半蔵門線、都営大江戸線「青山一丁目」4番出口より徒歩4分  
外苑東通りを六本木方面へ進み、「なか卯」を右折 直進50m先左手の建物

390-0821

長野県松本市筑摩 2-17-10

Tel : 0263 27 5396

Fax : 0263 27 2351

with-you@g-sekiryu.com

駅前大通りをまっすぐ、松本市美術館を左手に通りすぎ、国道19号（やまびこ道路）を右折 ススキ川を渡った100m先のファミリーマート隣の建物